

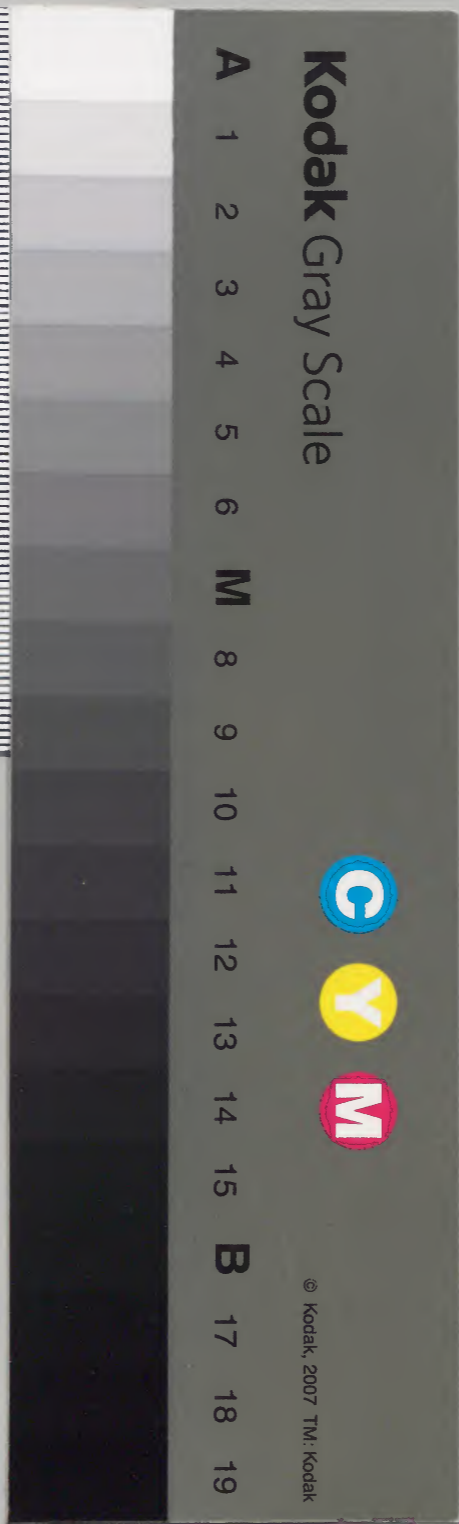
向園閑話

下

和書門類			
二七六八八號	八	九	三
函	架	冊	冊

內閣文庫		
和書	二七六八八號	三冊
函	架	冊

內閣文庫	
番號	和 27688
冊數	3 (3)
函號	174 52





明治十三年購求

加納文庫

數井

卷之下目錄

延喜式神名帳抄

和名抄武藏

青梅常法寺詩歌

慈覺在唐記抄

編並為文

彦成村草毒

小金井花

地藏寺

武列山崎組空藏院板佛

上利根川堤權現名

赤堀川前林院法橋

関宿水堀村鱈口

川妻村隠里ノ夏

円隠里より借受の膳枕

千秋和哥

小批泉谷寺

膝宜心

三社託宣

蛭蛇ニ誓シル茶

嶮別詩

安中侯詩

加瀬山

中九子大京明神

東坡詩

東坡年譜抄

瀨田村名主所藏

山口二鏡

程赤城詩

五江江原

古墓

世田谷

宇奈根村三条

鶴見川水源

喜多見村
廣元寺書

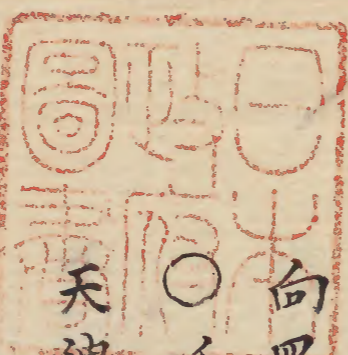
江南曲

渡唐芭蕉

三沢七騎

羽生平山

附



向墨閑話卷之下

○延喜式神名帳

天神地祇惣三千二百三十二座 社二千八百六十一處

大四百九十貳坐小二千六百四十座

武藏國四十四座 大二座 小四十二座

荏原郡二座 並 大森 北蒲田村 磐井神社 品川 鈴森

都筑郡一座 小 杉山神社 橋郡瀬田村小杉村小倉村赤平ニリ

多麻郡八座 小 阿伎苗神社 小野神社 本宿村 小社云

曹按大丸 村有九宮 大明神社 布田天神社 上布田村 永法寺持 大麻止乃豆天神社

糖木村卷之
大丸高屋安
小神田林
府西ノ末
洋熟也

大壽山勝
田寺持
大マトノツ
ハ大丸ナ
ン氏
大ニマトカ
ナル義
ナルベシ

阿豆佐味天神社

穴澤天神社天筋宮下

虎柏神社佐須村
祇園寺持

音溜神社アヲナミ
源大寺村
天神ヶ谷外

足立郡四座大ニ
小三足立神社

氷川神社名神大月
次新嘗

調神社

多氣比賣神社タケヒメノ

横見郡三座小横見神社

高負比古神社タケフイコ

伊波比神社

入間郡五座小

出雲伊波比神社

中氷川神社

廣瀨神社

物部天神社

國沼地祇神社

埼玉郡四座小

前玉神社二座

玉敷神社

官目神社

胃倉郡三座小

小波神社

出雲乃伊波比神社

稲乃賣神社イナノウメ

幡羅郡四座小

白髮神社

田中神社

榎山神社

奈良神社

加美郡四座小

七幡於神社

今城音八坂稻実神社

今城音坂稻実荒御魂神社

今城音坂稻実池上神社

秩父郡二座八

秩父神社

棕神社

兒玉郡一座 大 金佐奈神社 名神大

大里郡一座 小 高城神社

比企郡一座 小 比古乃速御玉比賣神社

那珂郡一座 小 應慈神社

○和名類聚抄五

武藏國 国府在多磨郡行程 管二十一 田三萬五千五百 上二十九日 下十五日

九十六步 正公谷四十万束 木箱百一万三千七百五十束 五把 雜縮三十一万三千七百五十束 五把

久良 久良 郡筑 豆々 多磨 太婆 圖府 橋榎 太知 北任原 江波

豊嶋 止志 未 足立 阿太 知 新座 尔比 久良 入間 伊苗 末 高野 古 末

比企 比 横見 与古美 今称吉見 埴玉 佐伊 太末 大里 於保 佐止 男倉 平夫 須万

幡羅原 捺澤 波羊 佐波 那珂 兒玉 古太 万 加美上

秩父 知々 夫

和名類聚抄六

武藏國八十三

多磨郡

小川 平加 波 川口 加波 久知 小揚 平也 木 小野 平 乃 新田 尔布 多

小島 平之 万 海田 安万 多 石津 伊之 郡 拍江 古乃 江 勢多

羣梅今の布多村、尔布多の上野死 細布をつく水多 上野合の死

小川村あり
小揚あり
上布田の
際村あり
小島あり
小川あり
小島あり
小川あり

○青梅常法禪寺 雪洞立岩禪師詩

仙谷山寺

神仙之谷遠如藍絕頂烟霞非易採香篆將薰雲
涌閣龍燈高掛雨過龕金注長逗英雄筆玉軸難
尋羽客函尤怪不傳彈法曲連峰香夜響松嵐

又

稻毛山畔谷名仙洞說仙人歷住年從駕白雲遊
海猶餘黃鶴唳芳田星司壽福增高寺神護衆龍
蹴蹋延靈嶽攀躋如換骨遠離世界旧風烟

寺ハ
岩村
石ノ云

下谷ハ水の流の速の速い水ハ其の速い水に
下谷ハ其の速い水に其の速い水に其の速い水に
二月廿八日仙谷山寺福寺にて 御山和志より云々

○在原記 慈覚

良日者謂甘露日及金剛峯日者當時無上明取在宿
与今日曜合以为良日 長跪者雙膝翹二足指也

菓油者謂胡桃之油名曰菓油 久留 弥

皂礬者其形似沙其色青黃其汁黑色以染衣等皂字
草音 嚕地羅者人血也

寶巖大德云此本徒山門某院来与奥抄所列重可
尋求矣 禪定院欣

享保十一^{丙午}年秋八月寫抄り

写平

惟圭 卅九
秀圓 六四

右善明寺文庫本より抄出ス

○憶昔於靈雲寺道場入灌頂時投華八葉文殊
支利菩薩也阿闍梨曰八葉文殊是即中臺大日也
因之佛頂法常恒勤之寬延三年庚午四月十四日夕
忽然而思之既投華在文殊自今而後亦應修文殊
咒法也翌十五日開闢修文殊咒法此日見大徑王延有

四月十日到五臺山之語矣感喜有餘是亦好相之一
也因記之者也 庚午四月十五日徧無為解脫謹志
右番場宿矢嶋忠兵衛所藏

○去歲國葛飾郡產城村の寺に於て初華と念を
御死も。札とてをくもくもくおと念ひく死す
ものありと云。此村ハ傳ハル産といふ村の中の一なり。

○二月晦、とら人にいさおれく小全井格の花見
し。橋のほらち。極座のうよみによりては

南北の底の谷ハ高保中の新田也。

何人のやけさうや。谷多し。或云。小倉村。田の終り。下。茶店あり。この主人。十二それ。すうやとをうしうあうと。

武野遊草晴夜。云。小倉井村といふところあり。一の橋あり。

小倉井村と云。け橋の橋の川のわが川を水の流あり。田岸

前後二里餘りの間に。一田二田ありあり。櫻橋とたり。

九十株といふ。桜のあり村ハ南の方ハ。野中。貫井。小倉井。

橋也。水の方ハ廻田。野中。鈴木。きぬ。武野よりいり

りし。且村志し。又東橋ハ川橋もたるといふ人の橋。不

と。川の橋ハ元文の比の人也。け橋の産をす。橋と

源。鈴木村より。橋多し。湯家あり。柏屋也。赤土。この

まじふ。春此末かくまた。橋のけ水向ふありと。あり

り。さう。さう。ありれありと。と。出と。又林。橋。或

東野。出也。やありと。新田あり。やうやく。小川。村

也。府中より。と。と。九二里。橋の道あり。三月朔。登戸村

○大尾村あり。地蔵寺といふ古寺あり。今、藤田村といふなり。故に大尾村の柳より布ある古瓦と傳へるなり。多し。谷石指市ありぬ。此寺古檀の伝は、地蔵寺ありゆゑ、寺号といふ。今、大尾村といふ地蔵寺あり。あり。五川の岸よりいふ。大尾村藤田村をとり入る。あり。地蔵寺を祥院の法殿。祠事記よりいふ。古瓦といふ。六月廿日。

○見流井留の川善徳の中。寺別山崎院といふ村あり。宝徳院といふ庵室の墓あり。板井の年号。

へ 永徳九年 當己年と四百四十一年

へ 宝徳三年 同三百七十三年

へ 文正三年 同三百五十六年

へ 文明五年 同三百五十三年

へ 弥勤二年

逆修秀永阿闍梨とあり

單按 會津旧事雜記より。流和の年号あり。二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

會津旧事雜記。耶麻郡新宮神益銘。弥勤元辛卯二月二十二日。

上利根川堤通羽生騎西領。

南縁谷村地先

二位殿 大権状

三位殿 大権状

北條 飯井村地光

一位殿 大権状

古三社 彼古時代不明。公家二人 流罪に由。其後此
寺より此社と傳ふことあり。

赤堀川通り 北條 前村地内。

後山折

静女道の市に橋あり。

思案橋

義経 宇波の宮道と云。故に神人
居りし人たと云ふ也。

静返

けしきより栗田甘田へ延き一矢。

同川通 園宿所。水海村。谷主要なる玉持の郷也。

若原を大に五寸形なりあり。但横切なり。

大寺 聖田の因守城あり。大佛あり。社之形は他

無。文龜三癸亥年八月日。大旦那 平右京亮政助

とあり。兼授大僧坊長。法印とあり。法お師の谷

よりあり。大道しけしき守りありとあり。

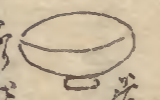
同川通り 川妻村

彼古の墳墓ありとあり。因、小石とあり。置。古墳中

より薬師佛經中。今庵有し。眼、薬師堂有し。
里人、あし、隠里よりふ。

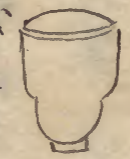
同村、谷主、多、寺、法、持。大徳、里、より、借、名、中、之、腰、梳
一通、有し。

平



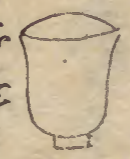
法隆寺
法隆寺

坪



法隆寺
法隆寺

椀



法隆寺
法隆寺



守、五、方、四、方

本、堂、古、お、し

右、小山、氏、と、通、に、見、入、り

○ 金、沢、千、秋、の、し、も

川、水、の、心、の、ま、き、春、の、あ、び、て、き、み、ら、者、に、此、海、を、ま、り、は

水、井、の、移、り、お、ま、り、を

玉、子、の、身、ふ、ま、を、こ、し、川、水、の、こ、ろ、を、ま、と、非、や、ま、ん

○ 小、松、村、泉、谷、寺、の、大、江、の、画、行、の、核、樹、あり。ま、れ、ハ、惠、願

上人、の、移、り、し。ま、り、杉、の、木、あり、と、云。死、ハ、一、ま、り、を

そ、や、ち、り、ぬ、と、使、修、の、お、ま、り、し。そ、り、ま、り

の、小、松、村、の、お、倉、に、掛、幅、を、あり。ハ、憲、明、山、翠、近、地、静

葉、多、多。藤、宜、卿、と、あり、又、一、ツ、ハ、之、社、の、託、宣、あり。

藤、宜、卿、ハ、
大、曾、根、
村、ノ、モ、ノ、
ハ、ト、キ、

皇シ三社
ノ託ヲ
凡シニ奇
ト云ヘシ
當時江戸
中橋ノ馬
者ノ所ニ
アリ。名ヲ
桃僊ト云。
六四五歳
ナルベシト。
小札農家
云ヘリ。

八幡大神

秩五と喰とくも。や藤の人のあこむん。
洞堂に在りし。いふと。心流の人の祈り。刻むん。

天照皇大神

謀斗ハ眼方利潤。れとも。必神時。の思と。や。る。
心五。一。思。の。依。は。あ。ふ。り。終。大。社。の。講。と。
あ。の。泥。連。と。あ。い。ふ。と。も。邪。人。の。家。に。
ま。は。ら。は。れ。る。と。も。愚。想。の。室。に。

春日大明神

あ。の。泥。連。と。あ。い。ふ。と。も。邪。人。の。家。に。
ま。は。ら。は。れ。る。と。も。愚。想。の。室。に。

神朝廷利官正四位上荒木田神主尚德謹書。□

三月十一日雨中。中。宮。

○ 蝮蛇ハ。螫ス。毒ヲ。下ル。ハ。蕪ハ。柿ニ。配シ。と。い。ふ。と。と。つ。ら。む。と。

即効ありと云。秩父山中。之。蝮蛇。と。と。して。五。八。霜。と。又。巴。が。

小使。し。ら。と。云。て。ぬ。り。つ。と。れ。を。部。中。に。念。お。と。云。

○ 嵯州造稿。云。卷。東都書鋪。雁金。在。伊。兵。未。發。行。

東都書鋪

天台雲色。菽。都下。又。芳菲。城。漁。通。新。水。揚。共。媚。曙。暎。
荻。花。迎。宝。馬。楊。柳。拂。春。衣。日。暮。人。廻。返。飛。鷹。千。騎。過。

清原信一。諸子會。嵯州園。

清原信一。會。過。未。可。把。杯。酒。為。者。問。春。人。新。裁。繫。馬。柳。

風輕花點衣。在久多竅。城市經原憲。亦知此趣不。

九月十二日

已落此山帽。後逢蟾窟秋。七風吹海嶠。清影滿城樓。
膝相千金債。菱公万古愁。浮沈誰可道。把酒不辭酬。

秋末同友人登東豐山

東豐山
新長谷
寺所謂
白馬堂
也。

蕭條秋色未。載酒問豐山。清梵鳴泉外。丹楓返翠間。
水禽迎客憫。野老飲牛還。莫謂鄰城市。一臨此得閑。

送井子林之牛宮接韓容

井通照
字子叔

揮鞭意氣有光輝。万里春風馬上衣。以扣藩侯

誇照乘。好從槎客問支機。天圍三備城樓壯。海濤
九列雲樹微。知汝文章驚吳越。待看更賦遠遊

和孫亭子源昌世見寄

謙亭
小宮山
木子進

聖代誰為德士吟。閑居君却惜光陰。史材嘗答殊恩
渥。稅政猶傳惠愛深。自古宦途徒巧拙。于今世態
有浮沈。已忘三載能知壁。何必陵陽淚濕襟。

和春謝諸子見還

春來車馬問柴門。例礙相迎且暗言。豈有鶯花供

彩衣。漫將雞黍對青樽。松杉雪落山一樹。楊柳風輕處。村。直。笑。近。郊。多。野。趣。飛。觴。好。友。到。黃。昏。

新嫁娘

昨日不知郎。今日初嫁郎。紅絲千萬條。不比郎情長。

傲明袁景文八新詩

詩名

新烟 新水 新燕 新州 新鶯 新柳 新蝶

新月

迎春曲 三首 第一首

春風都下醉清涼。舉策暫傷白玉駒。平紫人催新

醪酒。杜陵鶯囀未開花。

春雨

山中忘了掩柴扉。暮雨沈沈暗翠微。不識南溪花
蕨末。呼童燈下試春衣。

右嫌別送稿三卷借抄于小北泉岩寺

三月十日於市坊村

建

○安中侯校倉豫別詩

倚闌彩筆壽富宜。底賔歡笑醉披危。千年白鶴
翔青嶠。萬歲玄龜遊綠池。簾竹竿。添老。心。舒。
窓梅幹。秀。孫。枝。古。平。樂。多。避。齡。生。在。深。彩

覃云 昔者 吾及 南條 山人愛 世法轉 秀甚 今而思 之殆 三十餘 年

字老母祝侍。

画川條

源 字曰 仲行

市場村の病。今十所とて飯田長あり。此家母八十の時
賀侍といまり。とて。苦惱を。詩と示に。毎今早
八十二歳あり。

三月十七。○か保山北か保村あり。こよま見二歳といふあり。
到頂乾 山了源 寺。左田道院此ふよく良直ありて。今も西左のふ
杉田妙法 寺。城と築ふといふ。夫人の祝あり。源寺といふ。

門前。題目ノ碑あり。

當山十四 世日康 トマリ。七曲ト 五へド五 曲ハカリ 山ニボル し。夢見 カ崎モ 今ハ変 畑トス石 八幡宮 彫ル。北根村 トアリ。此寺三百年 前上か保村ヨリ引シト云。

日蓮宗の寺ありと。川崎の里に。甚だ甚だお修し。
○三月十七。中丸子村にやどり。村の中は。米の音
まこのとらどと。阿は。世村より。京石。寺といふ。農家あり。
先祖は。権氏。此女とめ。ひり。権氏。あり。いふ。幸士。大坂
河陣の時。おれ。あり。その。命。苦の。お。あ。あ。け。家
ふ。ゆ。り。い。は。さ。き。れ。と。一。箱。録。と。農。具。と。ね。と。ま。い。か
當。あ。ち。あ。せ。と。あ。り。と。よ。の。宗。と。わ。あ。り。ん。先。の。年。お。川
の。な。を。お。れ。く。田。畑。あ。り。い。先。の。書。お。し。一。箱。水。の。派。
ま。り。と。よ。て。先。祖。を。非。に。い。て。大。京。大。師。と。

社鼓兼
村笛喧
綠樹中
晚來人
於散月
澄暮春
風。覃

年二ののり。必多。ハ川。昔。て。冬。さ。ゆ。今。冬。あ。い。古。あ。み。家。傳。ハ。ハ。カ。一。本。即。錯。也。

○東坡詩 遠人羅水旱王命釋俘囚分縣傳明詔
循山得勝遊蕭條初出郭曠蕩實消憂薄暮未孤鎮
我臨憶武侯崢嶸依絕壑蒼茫瞰奔流半夜人啼急
橫空火氣浮天遙殊不辨風急已難收曉入陳倉縣
猶餘賣酒樓煙煤已狼藉吏卒尚呀咻公自注 十三日宿武城鎮即俗所謂石鼻寨也云孔明所築是夜二鼓寤雞大依相去三十里而見於武城

雞嶺雲霞古龍宮殿宇幽

公自注 縣有羅瓜峯龍宮寺

下畧

覃云今歲己巳元日宿於多麻郡是政村是夜初更
都下日本橋火作相去六十里而見於是政村

偶觀冰詩宛然尔時光景

三月望等於中九子村步舍

○熙寧二年己酉先生年三十四還朝監官告院按

烏臺詩話云熙寧二年某在京授差卷与王洸写詩

賦及蓮華經

元豐五年壬戌先生年四十七在黃州寓居臨皋亭
就東坡築雪堂自號東坡居士

東坡
年譜

元祐二年丁卯先生年五十二。初翰林學士。後除侍讀。又有昏子由日本扇後云。

元符元年戊寅。先生年六十三在谿別。又有記諸說云。海南以諸力糧。炎米之十六。今歲諸菜不熟。以客舶方至市有米也。乃戊寅十月二十一日昏。

右施法東坡集ヨリ抄出矣。三月十八日峯村雨中記。

○澁田村名之巽云。一所庵畫目。

○性空上人大概若經一毫。

大概若波羅蜜多經卷第一百一十三。

初分枝量切德品弟卅之土。

三藏法師玄奘奉詔譯。

世尊云何以眼處无二為之便元生為方便。

○黃蘗詩禪畫卷一卷。

草舍猿空後。莽蕩五湖居。人生方知足。惱破一時除。

有句處

任元昊

兩宗同一派。原不有分河。古朴知賢者。昭然說俗。

葉人乞州雨。雲水見無多。沈爾悟冰繁。勇於
濟法波。

夏桑木唐以律書。

南月紅羞江隔。一灣流水洗孤毫。画船沙岸
傍初定。月上方華。著幾信。

仲夏宿宣子伯弟先

寺山印冰書。

得字松葉海平。一慈心。扑我由衷寫。恁彼
豈分。信清滋有力。垢鞭即香村。取酒才寤。

茂。亭源本古深。

研日整村書志

妙道。名如志。是祖宗。分身在化。三五白。若人悟好
忠。當道。便清。從。有。書。主。翁。

辛丑。五。冬。月。廿。八。日。夏。桑。木。唐。書。志。

法。志。莫。此。在。善。在。行。

溫道人。

書

永祝

皇王萬春

丙午秋

法苑高泉年書

芳艸旣施不為帶一又亦習人又久長
水在恰似穠風云無意涼人自涼

繁林曉堂書

布衣半一輕暖扁舟秋野結無涯為
惟以) 呂京話生

李長生前

黃榮獨飲道人書

山中晏坐若忘滋味居處北茅屋
籬庭風搖瓊葉墜知物帝祥友好來

丙午夏日

黃榮南源書

一和嶽々老仙丘三涯臨啟首鞋兜十年
方有人乃老却長髮以堪意更稠

丙午秋源 三可獨立子

間亭獨坐自忘言萬頃煙霞足下屯一

片風光雙眼富大千沙界孰能論

歲丙午仲春

黃檗惟一實書

清晝柴門掩百情
正除年花苦
疏影
種中一帶多翻
三北
紫風景
江心
疏家
庭
始為心不
却
語
然
物
大
其
如
之
已
和
於
身
紫
山
或
瑤
曲

風來花自舞——
黃檗之句

辛丑臘春前十日書於雪軒精廬

黃檗善遇海做坡僮

山家八月天時物
自相便
葦茨新
壘隴
穡
花香滿
田剝
弟修
舊屋
斫
并
篔簹
清泉
世上
誰知我
優游
樂晚年

戊申春王

黃檗無心書

地無所
光
法
函
軒
之
金
名
皆
為
甘
自
素
田
乃
聖
之
清
香
賦
隨
風
逐
光
無
之
向
日
新
年
如
意
君
子
亦
未
敢
許
如
也

丁未春仲 玉荷軒之帖

書蘇松山書

由來學道以烟琴清酒高低互自心卷

右任時經又彭折後停處約至此一卷之刻

山南戶第穎俱消月滿林樾却綠強相動忘佛

子於未必是去有

友原學之珠筆

無玷印

明智之印

入境悠然古帝都 在民洋朴一賢思

十月不改仁皇化山鹿隨人滿道途

夢云 此詩 志先 無瑕 可為 歷卷 生亦 殆

甲辰夏 隨茲南都入境之作

黃黎學之瑞字

昨陟木老峯故意巔之抄眼底靡四維

胷中沒朕北松不待春蒼光必因日皎印

破千山色以前壽老趙

幻寓柏巖書

漢出青雲如乾坤不若松波向

浦地為早云一任隆冬

孫少壯之帖 之入 輔賢

日探信筆 富士 松栞

立軸

日岑信筆 春秋洗 松栞 彩

立軸 双

日雪村 福祿壽 墨画

立軸

日一休自画 六祖

立軸

惠臨入雄房開悟
爲迷処珍向拈曰

東海純一休去

○ 雲扑布袋 八十二前 智山杜長次 墨画

立軸

○ 山水 雲居等画

横巻 小庵風
マクリ

○ 小堀遠物 墨画

横軸

少く明快く以不及也

入ツる歌亦亦何々々

羊土印見し明く板圖防殿

ツ前く撰と大并流九野母屋以

ありし作我之何く明快く以

以し作し各委曲在立時考し

在より考しツ流之何く以

以入ツる之何く以し作し各委曲

中倉 〇去年、延和、何く以

五月十日 月三十一日 申末

申末 月三十一日 申末

五月十日

申末

小橋延江子

中市正

申末

相阿保蓮子 卷画

申末

将野村信筆 留士松造

松造

○ 隈元禄野子

申末

在涉元禄野子

菅原隈元子

○ 海北友松画

菅原三 長春局

○ 五月十日 月三十一日 申末
申末 月三十一日 申末
申末 月三十一日 申末

○ 月三十一日 申末

北后鏡

破字是

長命

梵字鏡

通照合則

別寫 山園

雨之脈

空海筆談 二枚
菅原志保 活字二枚

右常村玉虎 遠江墨 赤坂 深田 中野 田州人

字 恒三 五五

遠多云ハ字 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

ト一云ク 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

○程赤城 志保 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

沾粘誤

雨條 飛瀉 滿紅 栞 繁 沾 派 派 不 消 曉 霧 忽
急 還 忽 首 志 山 必 道 徑 如 逢

苦走程赤城

此のりきん似く 雨条 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

○駒井村 猪形 村 志保 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

村と志保村 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

と彦彦の臣 志保 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

○和泉村 猪形 村 志保 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

あゝ 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

た力 矢の 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

りよ 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五 恒三 五五

三月廿一日
訪者先年

如松

ノ三亭

ノ三亭

ノ三亭

ノ三亭

ノ三亭

ノ三亭

東坡詩

所謂奪

走煩郵

吏安間

愧老信

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

とよ一

○世田若依一万二千石彦根侯拜依あり。寛永十年周

あり。彦根村村あり。此村よりして村ありと云。

身延山客末

○宇奈志村。七亭。たまたま日蓮の二僧古一集より七平

余輩まで住持とて存念ともよと留せり。者宇奈志

といふなり。たまたま此村住持とて。多く住といふ。あまら

利を承りて。弟とあれしあり。一とに合ふといふ。

之より世田申すこと。庭に紅牡丹あり。在りて家此

たの事承りあり。二。彦根田直次の奥方の事ありといふ。二。二。二。二。

あり。志澤とて鶴とての村あり。二。二。二。二。二。二。二。二。

○天文年中上野國新田郡より出て小田原に侍。その後

陳中より在りて此とあり。宇奈志村より出て氏より侍。

荒井新馬治義。元龜四年癸酉年病死。

此村代々の墓を宇奈志村観音寺にあり。天台。此寺に

以基菩薩の像の薬師木像あり。佛光大師十一面の觀世音菩薩

あり。此寺より小田原にありて圓三寺よりいへるが兵火

のありて焼くあり。此寺の音は上と云ふ。二。二。二。二。

観音寺と改めといふ。

○馬川沢村大徳寺。日蓮宗。彦根田直次及奥方乃

宗

日蓮

三つぐく
 日蓮宗に
 横出で
 農家も
 判と
 厚。計
 常光寺
 之権し。
 甲列降
 烏山と
 之
 檀立あり。
 相し
 除死

寺に。此寺に奥方の湖交の家あり。近比下
 二つぐくと言。平家権村常光寺にあり。志深乃
 之。此寺よりあり。常光寺に大七公寺に
 張合あり。三月廿三日常光寺に所開

○鶴見川の水源と。たのこ。

鶴見川の末海は落り小根村まで川は五里。

小根村が川は移り。二十一町。川白村が池造村地境まで。十三町。

池造村地境は住い下村地境まで。十七町。住い下村地境は川白村地境まで。二十町。

川白村地境は市尾村地境まで。二十町。市尾村地境は大橋村地境まで。二十町。

あり

大橋村地境は上流村地境まで。六町。上流村地境は上流村地境まで。六町。

上流村地境は半井村地境まで。六町。半井村地境は麻生村地境まで。六町。

麻生村地境は終り谷村地境まで。二十町。終り谷村地境は大橋村地境まで。十五町。

大橋村地境は住い下村地境まで。二十町。住い下村地境は市尾村地境まで。二十町。

市尾村地境は市尾村地境まで。十五町。市尾村地境まで。十五町。

市尾村地境は市尾村地境まで。十六町。市尾村地境まで。十六町。

市尾村地境は市尾村地境まで。十八町。市尾村地境まで。十八町。

此上小山田村の山より五里あり。

小山田村地境は計三百十町あり。八里廿二町。

三月廿三日
田代五郎

右が林氏所示。

○若狭見村慶元寺。○
神宗十三年 若狭見村 慶元寺 建立の時 寺跡 七ノ五ノ八ノノノノ

上卿阿野中納言

寛永三年八月十九日 宣旨

若狭守平勝重

且令叙從五位下

藏人近衛權中将藤元親奉

此口宣ノ文板ニ
ホリテ寺ニアリ○

○喜多見氏戒名写

喜多見氏

慶元寺

一 洞雲院及常仙居士 十日

江戸信濃守

法岸院及心誓清圓大禪定尼

慶長七年八月朔日

江戸松津守女間云三喜多見氏

三 正徳院及理覚法心信士

慶長十七年七月七日

刑部少輔嫡男 江戸松津守朝忠

宗璞院及生無空花童女

慶長廿乙卯年四月五日

喜多見若狭守女号紀伊

二 玩極院及出過与衆存

元和五年八月十日

江戸信濃守前 江戸刑部少輔朝忠

五 前朝散大夫月山齋誓了達公

元和六年庚申七月八日

若狭守嫡子 号喜多見若狭守正忠

若岸院及桐覚春慶大禪定尼

右同年八月九日

潤宮主水佐女嫁 江戸刑部少輔

四 前若洲大守華林宗珍公

寛永四丁卯十二月廿六日

江戸松津守嫡男

喜多見若狭守勝忠

口宣ニ
勝重ト
八是元

慶德院啟心岳宗琳大禪定

寬永十九壬午年二月七日
間宮若狹守女嫁江戶撰津守生喜多見
若狹守

涼峯院啟覺譽清玄大禪定門

江戶彦八年間宮三郎若志乃妻
正保三丙戌年七月八日
空藏院啟父公

了性院啟春覺智負童子

正保四丁亥十二月廿六日
俗名ヲカニ

高巖院啟理月慶壽大姉

慶安元戌年年八月十一日
喜多見小大夫母公

桐香院啟月鑑智光童子

右同年十月廿三日
喜多見小大夫妻

梅巖院啟華屋理白童子

承應元壬辰二月七日
喜多見喜六郎妻

朝顏院啟元性周伯童子

同二癸巳閏六月朔日
喜多見彦左五門下

華雲院啟椿窓永壽大禪尼

明曆三丁酉八月六日
喜多見若狹守妻

周光院啟智覺性榮大姉

延宝四丙辰七月二日

心空院啟玄歇宗西居士

同七己未六月廿一日

宗寔院啟梅月惠法童子

天和元年酉二月廿日

寶龍院啟圓譽珠光大禪定尼

貞享元甲子十二月四日
喜多見宗函室

法性院啟宗源且理童子

同二乙丑三月十七日

松雲院啟性榮華石居士

貞享二乙丑九月廿五日
喜多見久大夫

松壽院啟然譽詠薰大姉

同三丙寅七月廿四日

雲暗院啟了月性圓居士

元祿二己巳正月三日
喜多見小年人

心光院啟出透淨掃大居士

元祿六癸酉七月廿三日

石川之水 津印送 漢七作 小川流とちり 水分 流く 魚多 魚
群て。 漢七作 揚り 魚群。 漢七作 漢系 全流 為人 死 羅す
云々。 漢七作 是又 水多 故 死 不 其 仕 方 在 使 心 也。 漢七作 山 改 易 云
云々。 漢七作 善 按 多 故 主 事 所 改 人 云 云。 漢七作 内 証 の 七 割 居 居
之 証 不 心 也。 漢七作 杉 年 越 中 云 云 也 証 と ち 事 進 行 也。 漢七作 本 國 勘 別
率 亦 に 印 して より 先 証 と 悔 人 也。 漢七作 船 夕 麻 子 十 元 証 據
乃 方 一 白 山 也 也 証 者 乃 也。 漢七作 後 年 痛 光 有 り 乃 時 了
越 中 乃 云 証 以 ね 也。 漢七作 乃 拾 使 率 亦 亦 に 印 して 乃 五 証 以 ね
越 中 乃 家 系 與 年 亦 七 乃 乃 推 使 乃 白 也。 漢七作 此 乃 證 有

也 何 乃 証 以 ね 也。 漢七作 乃 拾 使 率 亦 亦 に 印 して 乃 五 証 以 ね
乃 方 一 白 山 也 也 証 者 乃 也。 漢七作 後 年 痛 光 有 り 乃 時 了
越 中 乃 云 証 以 ね 也。 漢七作 乃 拾 使 率 亦 亦 に 印 して 乃 五 証 以 ね
越 中 乃 家 系 與 年 亦 七 乃 乃 推 使 乃 白 也。 漢七作 此 乃 證 有

亦一説

本林隈見録云々巻三云

写本あり

在る人亦授り出頭奉在る人亦来り出頭
在る人亦家滅せしむらに在る人亦来り出頭
事更なり相在る人亦授り出頭奉在る人亦来り出頭
常憲心の許代出頭奉在る人亦来り出頭
ま方の事亦授り出頭奉在る人亦来り出頭
進下無言なり在る人亦来り出頭奉在る人亦来り出頭
二前出頭奉在る人亦来り出頭奉在る人亦来り出頭
事亦在る人亦授り出頭奉在る人亦来り出頭
背き出頭奉在る人亦来り出頭奉在る人亦来り出頭

三月ハ書きたは在る人亦来り出頭奉在る人亦来り出頭
アハ如伊孫書云云云云云云云云云云云云云云云云云
引出書一各ハ是ハ如云云云云云云云云云云云云云云云
不審ナ有物ハ何ナ帝ニ因テ一ハ来り出頭奉在る人亦来り出頭
大ニ松子出頭奉在る人亦来り出頭奉在る人亦来り出頭
及ハ松子出頭奉在る人亦来り出頭奉在る人亦来り出頭
信ハ何定ナオホアテ云云云云云云云云云云云云云云云
一ハ新派云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
其前出頭奉在る人亦来り出頭奉在る人亦来り出頭

嘉禄寺又七月十日より例年常山寺遠忌の干部
撰りたり是又如くあ申とて入で致れは致りた
世に故の撰中より佛を奉事せ成候止宿せられ
平ハ申し知れ外撰中とお話すとて申れて佛堂
りされはるる奉事を見と致りていふもあつりく存と
申古嘉多見氏の撰候とて申しに申候といふは
心付御を合せし如く申れて佛堂を感候様一おし
難有や今申て福毛申す嘉持不存とて申し出候
左法不棄申し申す致りて申し今迄成りて申し

者の先祖達ひよる如くは流し一筆御下天
上人の御門合申す偏に首とて上り共此三年一書及
七年四月十日當寺へ嘉禄寺致し位牌前心未
詳に故の撰親にた為の撰を又御堂表申し候に命
致して法名を西光院順安道名居士とて申し
仁た為の撰家の乳母の撰親某と撰りて今申し
繁昌せしと撰たまふの撰り文化二年七月十日
命終に故の

一撰を又申すは撰り表御書おを首とて好在系とて申し

系家と下総國結城とに七多た為と云ふのありけ家と持
傳へ有らば中富所と系家と太夫と申す所はけ七多た為ハ
御寺と申皆其所と云ふ七多た為杖と申すは電は片
強家と申傳へ所はけ家と系家有らば法と申授るは
無思ふ解と結城とに七多た有らば地傳へ奥方と
結城と有て 葉と書出共所へ系家と持年と書
舞へおまへと云

たし中東と云ふ所を不入りしはけ在平伝候と系
家授る中東と村田と云ふ七多たに系家と持九 授書て

あゆまふと云ふ人七多たいかにしとて七多たとて南村
小富所授るしと云ふのい若くは授るの也家と云ふ者た也
物に主人御傳へて及も云ふ言に七多た授書て
りとおん中は物と云ふ所合と云ふ授る中傳へてりといはし
又傳へて漸のりたなり七多たとて七多たとて七多たとて七多た
百年か一余のりなり七多たとて七多たとて七多たとて七多た
たれん書てのりといはけ承りしりて七多たに七多たの
なり物と云ふ説ありたり七多たとて七多たとて七多たとて七多た
後見の人と云ふ行ふせよ

文化四丁卯歲二月記之

慶元寺十八世
大譽練作

大慶元寺 當位ハ社大寺比才ふあ是といふ二月廿三日
若見村ノ若せー 秋灯とくけくふれと笑ひ

又進取の寺社ノゆりてそのことありて所
あつたるはも 若ふあつたのふたうしあひ
又ハだしとく出さしゆりあり今この若見村
跡ノ元ノをありて書きたる慶元精舎此
大徳のころより感ふるにあまをわりのこと
若見村のよりあつた人の志もよれおして野史の

関文と神ノ是進とあるこの寺社と

このはかくても あつたはほりて進のやとり乃
よかかきとてあつたて

若見村ありといふは後山のものなりと

りー 推案
若花園

己巳三月念四猪屠於喜多見村里正西山宇在旅寓深筆
又山のよりと慶元寺に尋ひて

喜多見村
慶元寺

永劫山華林院慶元寺

関山真蓮社空譽上人

元禄元壬辰歲十二月六日

本ノ通言因名ヲ本知テ入寂ノ當年ニ至テ

在御

一心先院殿ニシテ

大心先院殿河内塔塚ノ南照寺ニシテ

名ヲ以テハ信ノ所ニシテ

三月廿一日

慶元寺住

真譽 練仰

今ノ住持ニシテシテ十餘年トシテ

○是乃村の枕流より一海蔵といふあり
漸来郎不悔舍恨立漁磯白鳥驚何より双に相對飛

古江南曲

鄭培

○ 渡唐ニ在箱 鄭培画

此の巻ノ音やあらしの飛の亦子 沈黙

世小後世所稱之渡唐也在若如日光山関氏切小
之市遊日元就君ノ書画不元濃淡可也 因
暮ノ返勅諾石善信同好ニ士云尔

奏刃夏 童雅識

云尔旧
作尔云
誤

此等本は流流の掛幅し此等の譯は華人
の書画に作らるる歎く多し其意は見えぬも 眞實
いふにめぐりし 二月廿

○二澤村の農家に小田原北条社古文書あり抄
そのありし中よ二澤の古書ありといふありと

此本はの中心をなすなり 二月廿

○村中村平山村ハ河越山のきふりて洋書あり三冊
むらありしあり平山武老本のらまありとの文あり
がいきものしといふまねをんとてどりあり 三月廿

右玉川在役中所記也

文化己巳四月十七日雨窓岑寂流流

一過 遠櫻主人

補逸

寛永十八年辛巳正月十日吉根源在為吉次也勘定次

小島子

此北より吉根源在の吉次也
司りしは吉根源在の吉次也

珍本 又 猶人

乃日記摘要より

同十九年壬午三月三日伊丹播磨守康勝酒井能伊守

忠吉杉浦田丸允正友子山島宗次子也

日記より

斗銘

覃

大道之行科量自平輕清重濁多摧無衝

画芝瀨

顯則產大同之礎隱則療南山之飢明其瑞燁其芝

○己巳四月十一日芙蓉館徐君懿德鄉伯館

○秦名天子冢曰長山漢曰陵故通名山陵

清高濬人天祿歲餘

○食單出郑望膳夫錄韋僕射巨源有燒尾宴食單

同上

○女子七、四十九陰絕、男子八、六十四陽絕、过此為

婚為野合、時叔梁紇过六十四娶顏氏少女故曰野合、

同上

○二十四橋 說楷揚列在唐時最為富盛、旧城南

北十五里一百一十步東西七里三十步有二十四橋

最西濁河茶園橋次東大明橋入西水門有九曲橋

次東正當師衙南門有下馬橋又東作坊橋、東河

轉向南有洗馬橋次南橋又南河師橋周家橋小市

橋廣濟橋新橋、開明橋顧家橋通泗橋太平橋利

國橋南水門有万歲橋青園橋自驛橋北河流東出

有參佐橋次東水門東出有山光橋又自衙門下馬橋

直南有北三橋中三橋南三橋、九橋不通船不在

章按通計
二十二
橋
二

二十四橋之數 同上

○雞冠 雞冠花佛名謂之波羅奢花又泚中
謂之洗手花中元節前兒童唱賣以供祖先 同上

○浣花天 放翁詩已過浣花天注四月十九日也
蜀人以此日遊于浣花溪上故云 同上 己巳四月十九日抄

○鈴の屋中在玉座下
まゝの屋のすぢのこゝを去るに今もあつた伊勢のこゝ

○高家太澤侍遊 上巻 藏書万巻毎月令
あつた人よせしめそのこゝをよませてもいふこと

おもしろ 本朝通禮二百巻 自らよまむ書され
法華經一字の石に書くこと 婦人筆の事いふ人
所くも 禮儀類典に書くことありて 浣花のこゝ文化
四年丁卯の春より病を治す たりはりあり
つめよすし 十七より卒すし 国中 彰尼 山海等
よ 送并ありしとせ

○宋李彦遠 字夷曠 公榘子也 宋学 字典
袁切並音元 說文 廣平之野人所登也 周礼 夏官遠師
掌四方之地名 註 遠地之廣平者

己卯春ハ
元禄二
年己巳
ナリ

○武列濃田谷依在見村内山麓、後光親濃田為と申志
百姓之持分下之畑、地之庄仕如光地以在見見後依地
時、破濃田為不申言ノ在、進敷中付田畑等、惣百姓
中山地如、以年之己、是為授意、上志、其如、濃田為、是也、
不、作、分、
右、元禄九年七月、出、代、官、永、田、作、美、ヨリ
出、の、古、文、書、先、年、會、計、所、中、ニ、テ、見、シ
車アリテ、竹橋、靈、簡、卷、ハ、抄、出、セリ
二、三、の、春、世、仕、と、云、フ、時、の、林、と、云、フ、上、の、松、の、多、ク、本、多、ク、
と、云、フ、事、也、小、事、ナリ、
己巳九月七日、卷、書、時、初、霜、滿、瓦

○武列田東之郡小抄之庄多小村之會寺依持志之先親を
寄附年 度長四年己亥二月十日 沖末下
天和二年二月十日 寛永十二年十一月十日 寛文

五年七月十一日 沖末下 三郡集郡トアリ

寄を宝生寺武列小多西郡大幡之内持志之
天正十九年 癸丑十一月日

寄を福之寺武列小多西郡北田小村之内持志之
天正十九年 癸丑十一月日 沖末下

武列田東之郡小抄之庄之内、右、院、依、持、志、之、先、親
寄附年 度長四年己亥二月十日 沖末印

山田村
持志之

○府中高安寺に十寸穂乃落也此の穂よと
と一今年の秋ある藩よりおきたつたれ一
布重のときにいそぐあれとも今いふ一其に
生をりし一寺法よりとよ 巳巳九月十日

○武列小松村 泉谷寺ハ橋村織本二郡の境
庫裡の方ハ織本郡ニ属一布重の方ハ橋村郡ニ
故一小松村ハ橋村郡ととし寺は方を織本郡
と出はし一高尾村のお後一 庚午五月十日

○小田東北条江知りる限る内去年玉川の急を

字一地名左の 一と一 永禄二年の比し

望也 六石大塚 六石殿 小札下丸子

飛毛 溝之口 望川橋 小札 末左

望 六石大塚 望川 多奈郡 菅田

小札 上丸子 望川 小札 泊井在

望中戸 小札 謝田 地左 小札 謝田

小札 高下 庚午二月吉祀

今 泊井在

遠櫻の森に登。水いづ川のまじうもたまんり。
このより沿河のともなるぬ。旅を移しき神。日記し。
こころのまの。むゆとたなり。たきのあはれの神ふ
きりあ。小葉の相ふ映ぐ。井つきのをりめはり。
家より降りぬ。山本とまんの神奉。まらえり。
こころ。こころ。たおまののりし。むゆとたなり。
かこ美にまらひ。むゆとたなり。月ひのこころ。
らり。一歩もたりに。たおまののりし。むゆとたなり。

こころ。こころ。たおまののりし。むゆとたなり。
かこ美にまらひ。むゆとたなり。月ひのこころ。
らり。一歩もたりに。たおまののりし。むゆとたなり。
こころ。こころ。たおまののりし。むゆとたなり。
かこ美にまらひ。むゆとたなり。月ひのこころ。
らり。一歩もたりに。たおまののりし。むゆとたなり。
こころ。こころ。たおまののりし。むゆとたなり。
かこ美にまらひ。むゆとたなり。月ひのこころ。
らり。一歩もたりに。たおまののりし。むゆとたなり。

さうのまゝのまゝのつゝあて。こゝひとせう。神々
よき侍つたり。おもひと遠心とや。旅の合りも
はくれこし。あじんを。これまうけたまへり。あ
ねのあてとしとく。ねさうのいともなるこ
し。うの記は。あてかまのこたへん。たまはるこ
のあて。あまはあて。いよせはんあて。あての上にて
たひひゆ。いよせはんあて。あてのあて。あて
あて。いよせはんあて。あて。あて。あて。あて。あて。
かゝす。あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。

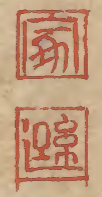
望もいんこ。あまはあて。あて。あて。あて。
あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。
河のあて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。
池のあて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。
あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。
あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。
あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。あて。

同一年のうりき
またた

南部太田翁行役之暇。所手錄。綢布日記。玉水餘波。玉川砂。玉川披砂。向困間語。各若干冊。圖若干幅。他人以三年之久。所弗能爲。而翁則十旬之。仍能爲之。他人以十夫之產。所弗能給。而翁則一人之牛。能書之。雖終夜不寢。兩年並下。尚恐不足。况職事之暇。年。能者所爲。不能者固不可測也。予就其篋。取而閱之。凡其所履歷。細瑣不遺。至其俱收。殆使圈流之。較人之秘。無復所韜藏焉。吁。其悉矣。或詰之曰。翁不

是。何使使者年。何意乃爲探賄使者也。不然。十旬之役。尋竒行幽。何暇及職事。又有非之者曰。尋常俗吏之態。奉役郊闕。必挾威力。以驅使民。甚之。至於揮鞭。管索賄賂。而翁則吏之僭者。固已論於此。已但吏之僭也。乃欲搯真境之秘。恐之使民。不免乎驅使。其於雅俗。雖血異。而在民。則均是一累。予笑而解之曰。是何傷焉。擷筆以爲鞭笞。露紙以爲賂賂。觸之而人不怨。貪之而名不丐。且使不穢。一丁之民。懷篤於古之心。此亦布化之一章。若夫藉此而疑職事之或廢焉。

則固不能者之所怪焉。予豈阿於取好乎哉。予豈阿
於所好乎哉。己巳初秋仲南野樵藏。



起于仲夏廿八日五宿中希田村

